九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「絶景にむかふ時はうばはれて不叶」の意味

白石，悌三

https://doi.org/10.15017/12265

出版情報：語文研究. 19, pp.24-34, 1965-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「絶景にむかふ時はうばはれて不レ叶」の意味

白石悌三

本稿引くところのほとんどは既に衆知の資料である。しかも説くところの若干は筆者自身他でふれた事がある。但し学界の雑誌ではなかったので、意をつくすことなく批判も受けずじまいになった。未だ実証の段階ではないが、与えられた機会に考えを整理して、名所の句と「かるみ」の問題に一つの観点を提起しておきたいと思う。

一

『おくのほそ道』は芭蕉自らが完成を認めた唯一の紀行文である。それは次の諸点を綜合して推察できる。

1 他の紀行文は生前刊行されていない。『おくのほそ道』も刊行されていないが、素竜に清書させて装幀した原本がある。刊行されなかったのは、その年芭蕉が死んだためか。

2 他の紀行文には芭蕉がそれを最終的な題号として命名したという証拠がなく、そのためか別称の伝わるものが多いが、『おくのほそ道』には芭蕉の自筆題簽があって、別称はない。

3 公表を意図して書いた唯一の俳文「幻住庵記」の場合、「他のそしりをまぬかれ候様に可レ被レ成候」と去来に相談し、「誹文御存知なきと被レ仰候へ共、実文にたがひ候半ば無念之事に候間、御むづかしながら御加筆被レ下候へ」(元禄三年書簡)と儒医であるその兄元端の意見まで徴しているが、『おくのほそ道』の場合も「芭蕉の翁一生の紀行品々あるが中に、此紀行はみづからもいみじと思れけるにや、後世の褒貶をも恐れて予が先師葛飾の隠士素堂へも相談ありて文章をとゝのをりければ…」(来雪庵後素堂『奥のほそ道解』)と、同様の配慮がうかがわれる。

4 『野ざらし紀行』の場合「紀行の式にもあらず」(野晒紀行絵巻跋)と、また『笈の小文』の場合「道すがらの小記を集め」たにすぎぬ(宝永六年刊本序)と、謙辞ではあろうが共に他見を恥じているが、『おくのほそ道』の場合、去来は「元禄七ねんの水無月予が方に偶居ましまして、かつ〳〵ほのめかし給ふ」[註1](去来本奥)と芭蕉自讃の作品であったことを記している。

5 死の床でまで等類に気を使ったほどの芭蕉が、他の紀行文に試みた表現や趣向を、公表した「幻住庵記」や『おくのほそ道』

に繰返している。註2

したがって他の紀行文は、『おくのほそ道』という唯一の紀行文を成就するために、芭蕉によって一・二年余りで次々に書き捨てられた試筆といえよう。たとえば

〈鹿島紀行〉

この秋鹿島の山の月見むと、思ひ立つことあり。……

月の光、雨の音、たゞあはれなるけしきのみ胸にみちて、言ふべき言の葉もなし。はる〳〵と月見に来たるかひなきこそ、本意なきわざなれ。

〈笈の小文〉

弥生半過る程、そゞろに浮き立心の花の、我を導枝折となりて、吉野の花に思ひ立んとするに……

吉野の花に三日とゞまりて、曙・黄昏のけしきに向かひ、有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは摂政公のながめに奪はれ、西行の枝折に迷ひ、かの貞室が是は〳〵と打なぐりたるに、われ言はん言葉もなくて、いたづらに口を閉ぢたる、いと口惜し。思ひ立たる風流、いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり。

〈おくのほそ道〉

股引の破をつゞり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて……

造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽さむ。（中略）

松島や鶴に身を借れほとゝぎす　曽良

予は口を閉ぢて眠らんとして寝ねられず。旧庵を別るゝ時、素堂松島の詩あり、原安適、松が浦島の和歌を贈らる。袋を解てこよひの友とす。

こゝにある固定した手法があったとしても、だから芭蕉にとって作品が類型的という非難は当らない。繰返しの試筆によってこそ表現は定着する。その定着の過程に芭蕉の中にせめぎあうものゝ顕れを読みとりたいと思うのである。

註

(1)「ほのめかす」の語意は「1ほのめくやうにす　2ほのかに様子にあらはす　諷して示す　そぶりに表はす　にほはす」（大日本国語辞典・大辞典、大言海もほぼ同じ）とある。2の場合、諷示する内容はその人にとって常に肯定的価値をもっているから、諷示の度合によっては称讃の意が表に出ることも考えられる。転じて「自讃する、他讃する」の意に解される用例を、本例に近いところで若干あげておこう。

他門の人に対して当流をほのめかし（去来・答許子問難弁）

西花坊に此ながめの賦つくりたりとほのめかされて（去来・後磨山ノ賦〈風俗文選〉）

すいたるどちはかしらつどへて当時の宗匠とし、とものみやつこいとまあれやといひふらしほのめかしける（其角・あけぼの〈類柑文集）

須磨の蜑の汐やく煙ほのめかして、公家達のたゝずませ給ふ御けしき（其角・家々の名所〈類柑文集）

大都長途の興賞、わずかの笠の下すゞみと聞えける小夜の中山の命も、廿年前のむかしなり。今もほのめかすべき一句には、

夏の月御油より出て赤坂や　（涼石）

わがうし丈芝坊白居々士は、むかし翁の旅のやどりに、風流の

しれものなりとほのめかされし画工なにがしがしそくなりとて
（たまくしげ）

(2)拙稿『おくのほそ道評釈』解題

二

志田義秀「大観の句と芭蕉」（『奥の細道・芭蕉・蕪村』所収）はこの手法の拠るところを、「景にあへば画すと東坡のいへるごとく言葉なし」という『俳諧旅のひとつ』の記事から蘇東坡と推測している。『沾徳随筆』に「予おもふに、むかし飛鳥井雅章卿の関東下向の頃／かたりつぎいひつぐや誰およぶべきことのはもなき不二の高根は／といふ歌まことにしたはるゝなり。かたりつぎいひつぐは万葉の詞也。中院通茂卿の下向の時、家隆の立もをよばぬの歌を思ひては富士に歌もなきと感られしは、まことによみたるよりもまさりはべらん歟」と和歌の場合を述べた記事もあるから、蘇東坡に限るかどうかは措くとして、先蹤のある典型的手法には違いない。志田博士の論文には、芭蕉および門人の関連した言説が豊富に引かれているが、右の手法を理解するために、『三冊子』が伝える芭蕉自身の次の意見だけはぜひ理解しておきたい。

絶景にむかふ時は、うばはれて不レ叶。ものを見て、取所を心に留て不レ消。書写して静に句すべし。うばはれぬ心得もある事也。其おもふ処しきりにして、猶かなはざる時は書うつす也。あぐむべからず。

従来行われているこの文章の冒頭部の解釈は、もう一度厳密に考えなおしてみる必要がある。

著者土芳は続けて「師、まつ島にて句なし。大切の事也」と言い、また『簑虫庵集』にも、さる餞別吟に「士峯顔を改ず共、風雅に時あり。必詠を心みたまへ。予も付て見まほしく、しきりにうらやましく。絶景ものに心うばはる所古翁も常に慎り」と前書している。芭蕉言うところの「絶景」が、つまり松島や富士の如きを指すものと解している。「絶景」の語の芭蕉に近い用例を更に当ると

近江八景は湖水の絶景をあつむ（千那・近江八景序〈風俗文選〉）

絶レ景　五月雨や富士の煙の其後は（其角・華摘）

松島宮島の絶景を詩に賦しても（難波みやげ）

等々いずれも名所である。また、芭蕉と同時期に全国各地を巡歴した大淀三千風が、その見聞録『日本行脚文集』の巻頭に掲げる本朝十二景は、体験に基いて当時の俳人の感覚で選出した絶景であるから参考になる。

第一 駿河 田子　二 奥州 松島　三 筑前 箱崎　四 丹後 橋立　五 紀伊 若浦
六 近江 湖　七 安芸 厳島　八 出羽 蚶象　九 伊勢 朝熊　十 出雲 松江
十一 播磨 明石　十二 武蔵 金沢

富士とは言わずに田子というなど、こゝにはあきらかに一つの類型がある。すなわち、芭蕉が松島を「扶桑第一の好風」として「洞庭・西湖に恥ず」と言った規範意識である。『名所方角鈔』[註2]（宗祇著・寛文十二年刊）で検索すると、十二景中、松江・金沢を除いた十景はすべて「名所」[註3]なので、試みに、当時を代表する名所和歌集から歌数の多い順位に十二景を選んで比較してみよう。万葉集についての『楢山拾葉』（石川清民編・寛文十一年刊）、二十一代集についての『類字名所和歌集』（昌琢編・寛永八年刊）をそれに当て

るというのは、『おくのほそ道』の旅の手引として「名勝備忘録」を作成するのに曽良が用いているからである。

〈楢山拾葉〉

吉野57　春日52　奈良50　難波40　住吉39　佐保35　以下略

（数字は歌数を示す。）

〈類字名所和歌集〉

吉野381　難波253　逢坂227　住吉218　若浦167　春日160　龍田128

富士127　滋賀122　須磨107　三笠106　宇治101

都周辺の名所に歌が集中しているので、三千風の十二景と必ずしも一致しないが、それでも若浦・富士・須磨明石・琵琶湖等は共通している。吉野が前者にもれているのは、あまりに和歌的で、漢詩的な山水のあしらいに欠けるところがあったからであろう。たしかに近世の旅は視野を広げ、居ながらにして歌われた言葉の上だけの名所、もはや自然の景観を保っていない名所をふるいおとした。しかしその上で、従来の和歌的類型と「絶景」という漢語自体のもつ漢詩的類型とが交わる地点を絶景と認めたようである。アルピニズムの発見した風景の如きに対してはいまだ感動すべき類型をもたなかったので、芭蕉にとって八ケ岳山麓を縫う「野ざらし紀行」の帰路は紀行文とはならず、立山・白山を踏破した三千風もそれを十二景に数えることをしなかった。つまり「絶景」は「造化の功」それ自身としては存在しない。風雅の伝統の中で類型化することによって、景を絶し、造化の功を見る、という感動が生れる。絶景はその感動の対象として存在するのである。

「うばはれて不レ叶」の例としては、『おくのほそ道』の須賀川で等窮から「白河の関いかにこえつるや」と問われ、「長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懐旧に腸を断て、はか〴〵しう思ひめぐらさず」と答える箇所があげられる。ところが当時、白川の関には往時をしのばせる風景は既になく、霧雨の中を芭蕉等は関跡についても判然としないまゝ、新道から旧道をまわって白河へ出ている。したがって魂をうばったのはけっして風景そのものではなく、能因の「秋風を耳に残し」頼政の「紅葉を俤にして」眺めた風景なのである。『笈の小文』の吉野で芭蕉が「口を閉ぢた」のも、「摂政公のながめに奪はれ」たからであった。引くまでもない「詩歌連俳はともに風雅也。上三のものには余す所も有。その余す処迄俳はいたらずと云所なし」という『三冊子』の一節であるが、そこで「見るに有、聞に有、作者感るや句となる」創作過程をうばうものは、「花に鳴鶯」「水に住む蛙」という伝統的類型であった。「凡物を作するに、本性をしるべし、しらざる時は珍物新詞に魂を奪はれて外の事になれり。魂を奪るゝは其物に着する故也。是を本意を失ふと云」との『去来抄』の論理は、意図を異にするが援用してよいだろう。

「うばはれて不レ叶」は伝統的類型に執着する故に眼前の景の本意を失うことである。「不レ叶二其景一」[註4]である。その時には、「物を見て取所を心に留めて不レ消、書写して静に句すべし」というのが芭蕉の言った「うばはれぬ心得」であった。

志田博士は、前記の論文を「だから芭蕉は赤冊子が伝へてゐたやうに、自分が有磯海を大観した句や富士を大観した句について、大観に接しては大観の句を詠むべきことを論してゐたのである」とい

う結論に導くために、「魂を奪ふやうな絶景は、程度の差はあっても兎に角大観の風景である」というが、大観の字義に限定を与えない限り、素朴にすぎる近代的解釈ということになろう。誤解のないように「赤冊子」のその部分を引いておくが、

早稲の香やわけ入右は有磯海

一をねはしぐるゝ雲か雪の不二

此句、師のいはく、「若、大国に入て句をいふ時は、その心得有。みやこがた名有もの、かゞの国に行て、くんぜ川とかいふ川にて、ごり踏という句有。たとえ佳句とても、その位をしらざれば也。」ありそも其心遣ひをみるべし。また不二の句も、山のすがた是程のけしきにもなくては、異山とひとつに成べし。

芭蕉の言は、いま私に「　」を付けた部分に限られるのではあるまいか。とすれば、加賀百万石に対する挨拶として「くんぜ川」では位があわないということを言ったまでで、それを有磯海・富士の二句に適用したのは土芳の意見であろう。少くとも富士の句についてはそうとるべきである。『三冊子』については、芭蕉の意見と土芳の意見とを読み分ける注意が必要であろう。

註

(1)『近江八景詩』が当時版を重ねており、『難波みやげ』の筆録者も儒者である。『和漢三才図絵』はその地理門のうち松島にのみ絶景の語を与えている。いずれも漢詩文的用法ではある。

(2)類書では『誹枕』（幽山編・延宝八年刊）に金沢の句初出。

(3)『俳諧名目抄』に「歌に詠たる所を名所といふ」と定義。

(4)嵯峨日記。本稿の第五章に引用。

三

大方題に名所をいだしたらんに、読ならはしたる所ども、さらでは少よせありぬべからんをもとめて、案じつゞけて見るべし。花さかぬ山にも花をさかせ、紅葉をせさせん事、只今其所に望て歴覧せんに、花も紅葉もあらば景気にしたがひてよむべし。さらではふるき事をいくたびも案じつゞくべきなり。おほよどの浦にも今は松なし。住吉の松も浪かけず。かゝれどもなをいひふるしたるすぢをよむべし。ながらのはしなどは昔より絶にしかば、ことふりにけり。水無瀬川水あれども水なしとよむべき也。（詠歌一体）

右の如く名所の歌は、実景を離れて古歌の世界を踏襲し、題詠風に詠みつがれる。この傾向は中世を通して一そう増長され、連歌・俳諧へもちこされた。

かかる名所の句の伝統的心得を、いま紹巴の『連歌教訓』を軸にして整理すると

1寄合―名所の連歌は草木・鳥獣も其所に詠みならはしたるものを沙汰すべし。

『吾妻問答』は更に詳しく「名所の句をする時、其の名所の寄せ候はでは悪しく候。一句に詮なき事など侍るは見苦しく候。たとへば、吉野には花・雪などをそへ、立田には紅葉・鹿などをいひ、弓槻が嶽には雲をそへ、浅間山には煙をそへなどする事なり」という。

2風詞―夕立の降る山本、いさしら川の関、いつかまたあふ坂、とふ人もなには、等風詞にいう時は、別に寄合の沙汰なき也。

この手でいくと、『当風連歌秘事』に「知らざる名所を付る心持之事は、清見が関には万物にきよき心、相坂には又逢ふ心を付る也。高砂には高き心を付也」という居ながらにしての作も可能である。

3景色―松島・三嶋・須磨・明石・難波・住吉などの面白き名所を、其景色をだにも言ひ立ぬれば、別に読たるものに沙汰なき也。

ということになり、当然俳諧もそれを継承している。

1の継承は、しかし初期俳諧にとゞまる。『名所方角鈔』等と『俳諧類船集』で比較してみると、わずかに中世軍記物関係の故事と近世の名物等で範囲を拡張しただけで、他はそのまゝの継承といってよい。

2の風詞は耳なれない語であるが、地名への掛詞ととるなら雅文学・俗文学を通じての技法である。従ってこの手法による江戸時代の連歌の発句には、俳諧の発句と見まがうものさえある。また同じ手法のパロディーが貞門時代には流行する。『竹斉』の道行、立圃の『みちのき』の類、[註1]『東海道名所記』の狂歌や狂句等みな然りである。『おくのほそ道』に目立つ地名詠み込みの発句も、その流れの末にあるが、今日その評価は、土地の名にこめられた鎮魂的意義を重んずる解釈と、言語遊戯として軽くうち興じたとする解釈が併立したまゝ、実証的に両者を計量する動きがない。この点についてはいずれ稿を改める。このように雅俗ともに地名を心として掛ける知的手法から、地名自体のもつイメージを一句の匂いとして生かす余情的手法への推移は、芭蕉の発句においても連句においても顕著である。

3の景色をそのまゝに描く手法も、となえられた当時では必ずしも写生を意味するものではなく、伝統的類型に従えば机上の作でかまわなかった。談林の見立てもその類型を前程としたパロディーにすぎない。芭蕉が名所の句で強調したのはこの3についてであった。『旅寝論』に「一とせ人々集りて、木曽塚の句を吟じけるに、先師一句も取給はず。門人に語りて曰、都て物の讃・名所等の句は、先其場をしるをかんやうとす。西行の讃を文覚の絵に書、あかしの発句を松島にも用ひ侍らんは浅ましかるべし。句の善悪は第二の事也となり」[註2]とみえる。初期俳諧からの脱出に当って『東日記』の才麿序は「…五月雨に海をよせ、舞には必色を染て、をのずからなる風景をしらず。作を離れて作ある処を見ず。此時にのぞむでは学者もなづみ、達人も筆をすつ」と述べているが、「絶景にむかふ時は、うばはれて不レ叶」の呻吟もこの実践において生れた。

芭蕉のうちにあってその旅を促したものは一つには歌枕への強い憧れであり、更にはそれを机上の『松葉集』で満たしえず、「耳にふれていまだに見ぬさかひ」をその足で踏みたいという元禄の実証精神であった。歴史的には好奇心というべきかもしれないが、少くとも近世のもつより近代的側面であり、それは風雅の伝統が築きあげた歌枕という権威を認めそれに魅かれて疑いもなく句作りしようとする、いわば封建的姿勢とは本来矛盾するものであった。芭蕉が名所をその足で踏み、詠む事によって自ら風雅の伝統に参入しようとする時、それは真向から伝統に対決する事になった。

たるよし、文通に申されける。是をみづからの面目になしておもふ時は、満山の花にかよひぬべき一句の含はたしか也。

と自讃しているが、「其景情の和歌にもれてやむまじき所」[註1]と芭蕉も認めたのであろう。土芳は「松の事は松に習へ」[註2]の教えを、「習へといふは、物に入てその微の顕れて情感るや句と成ル所也。たとへ、ものあらわにいひ出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物我二つに成りて、その情誠に不レ至。私意のなす作意也」と解している。これは正論であろう。しかし『句兄弟』の言及した『雑談集』の論は、「すべて景に合せては情負るゆへ、情をこらして扨、景を尋ぬるが此道の手成べし。富士を見ては、発句のちいさく成ぬるは、心の及ばざるゆへ也」と手をあかしている。土芳の言にかんがみて其角の句がともすれば作意におちる所以であった。作者と言われる其角にとっては、しかしあらかじめ情をこらす事で伝統的類型に対処したわけである。其角は景情をもっとも対立的にとらえて情を重んじた一人で、むしろその情が一句の主題として強く出過ぎるきらいがあった。同じく『雑談集』に、「いはゞ情のうすき句はをのづから見あきもし、聞ふるさるゝにや」と「情の厚き句」を肯定する論を吐いているが、「花ざかり山は日ごろのあさぼらけ」という実は吉野の曙を詠んだ芭蕉の一句など、まさに情のうすい句であった。もとより芭蕉自身の意にも満たなかったから、捨てゝ口を閉じることにしたものであろう。

同じいきさつを『去来抄』は次のように伝えている。

おとゝひはあの山こえつ花盛　　去来

此は猿簑二三年前の吟也。先師曰、この句いま聞人有まじ。

註

(1) 拙稿「立圃三点」（「近世文芸・資料と考証」3所収）

(2) 『去来抄』にも同様の記事がみえる。

四

『笈の小文』の場合を考えよう。『槐山抬葉』に五七首、『類字名所和歌集』に三八一首の重みを負う最大の名所吉野である。

吉野は和歌の名所、如意は誹諧の名所と云はよし。芳野ははいかいの名所にあらずと云は非也。此故に花やよし野を詠ぜんと、すこしも和歌の領を誹諧よりをして作するにあらず。花・よしのにも又はいかいの領有。古人其景情の和歌にもれてやむまじき所有を以て、誹諧は行れたり。是を双方に引わけたる物のごとくさたせんは、却而古風にちかし。

という『旅寝論』の意見は、芭蕉の意見でもあったろう。しかし『笈の小文』の吉野で芭蕉はその確固たる伝統的類型に蓦われて「いたづらに口を閉ぢ」るばかりであった。「あぐむべからず」、そのためにはまず虚心に「物を見て取」らねばならない。松の事は松に習うのが芭蕉の方法であった。其角が『句兄弟』に

景情のはなるゝといふ事、雑談集に論ぜるごとく也。近くといはゞ、先年

明星やさくら定めぬ山かつら

と云し句、当座にはさのみ興感せざりしを、芭蕉翁、吉野山にあそべる時、山中の美景にけをされ、古き歌どもの信を感ぜし叙（ツイデ）、明星の山かつらに明残るけしき、此句のうらやましく覚え

一両年を待べし、と也。その後、杜国が徒と吉野行脚したまひける道よりの文に、或は「吉野を花の山」といひ、或は「是は〳〵とばかり」と聞えしに魂を奪はれ、又は其角が「桜さだめよ」といひしに気色をとられて、吉野に発句もなかりき。只「一昨日はあの山こえつ」と日々吟じ行侍るのみ、と也。その後、此発句をかたり、人もうけとりけり。今一両年早かるべしとは、いかでかしり給ひけん。予は却てゆめにもしらざる事なりけり。

以上の『句兄弟』と『去来抄』の引用から知られる吉野からの其角宛・去来宛両書簡に合わせて、同じくこの旅中に書かれた四月二十五日付猿雖宛の書簡をも注意したい。旅中倉卒の間の執筆とて句作のいとまもなかったのであろうが、「布留の社に詣、神杉など拝みて、声ばかりこそ昔なりけれ、と詠し郭公の比にさへなりけれと、おもしろくて滝山に昇る。帝の御覧に入たる事、古今集に侍れば、猶なつかしきまゝに、弐拾五丁分け登る。滝の景色言葉なし」と、また須磨の哀史を述べ来って「須磨寺のさびしさ、口を閉たるばかりに候。蟬折・高麗笛・料足十疋見るまでもなし。此海見たらんこそ物には代へらじと、明石より須磨に帰りて泊る」と、繰返しこの筆法があらわれる。同じ須磨を『笈の小文』では、「かゝる所の秋なりけりとかや、此浦の実は秋をむねとするなるべし。悲しさ、寂しさ、言はむかたなく、秋なりせば、いさゝか心のはしをも言ひ出べき物をと思ふぞ、我心匠の拙なきを知らぬに似たり」として「須磨寺や吹かぬ笛聞く木下闇」の句を掲げるが、これは其角流に情をこらして景をたづねた故の作意があらわである。

伝統と創造、創造における景と情、ゆきづまりからくるこの一連の動揺を、仮に吉野体験と呼んでおこう。『笈の小文』は芭蕉の芸術観の様々な昂揚を示しているが、その中で最大の名所吉野に対決した時、芭蕉はたゞ「おとゝひはあの山こえつ花盛」を吟じ行くばかりであったという。芭蕉には詠まなければならないとする伝統の要請があった。しかし松の事を松に習う芭蕉の方法は、名所という強烈な伝統的類型を前にして新しみの発見に苦渋した。「其場をしるをかんやう」とする名所の句の場合、特に『去来抄』のいう「俳諧は新敷趣を専とすといへども、物の本情を違うていふ物にあらず」との規制は強く働いた筈である。この相互規制はともすると循環論に陥りかねない。その軋轢が『鹿島紀行』では「本意なきわざなれ」とも、『笈の小文』では「いと口惜し」「無興の事なり」ともいう表現になっている。その時口をついて出た去来の句のとらわれのない軽さに、芭蕉は思いがけぬ方向を感得したに違いない。去来が「その後、此発句をかたり、人もうけとりけり」と言った時点は、元禄元年の『笈の小文』の旅の後である。元禄二年刊の『あら野』において、許六は「かるみ」の現われを指適しており、元禄三年「木のもとは汁も鱠も桜かな」を作った時、芭蕉は「花見の句のかゝりを少し心得て、軽みをしたり」と言ったという。「かゝり」とは「詞の音楽的諧調」[註3]を指す。この段階での「軽み」とは、「汁も鱠も」という俗語による表現のはずみをいうものであろう。とすると、ジレンマの中で「おとゝひはあの山こえつ」と口ずさんで行った俗語のリズム、その解放感が伏線となって、自覚的な「軽み」の試作を導いたとはいえないだろうか。軽みへの示唆が、伝統的類

型化の最も著しい名所の句においてまずあったということは、当然でもあったろう。その意味で『笈の小文』の吉野体験をひとつの転機と認めたいのである。

註

(1)去来の用例の多くは景情と熟した形である。

すべて古歌古詩を取申候事も、情を取り候にも、景を取候にも、一段とせめ上候而取申たるがよく候。（去来文）

と、常識的な論法に従って対立的にいう場合もあるが、同じ文の続きに

すべて古歌など取らんには、一しほ風情も情もせめ上申したき事に奉レ存候。

と、前者の景は風情の語で置きかえられている。しかして『去来抄』は「風情と謂来るを、文考は風姿・風情と二つに分て教らるゝ、尤さとし安し」といゝ、当の文考は『俳諧十論』に「姿情ノ論」を説いて、「今様は目に其姿を見て言語の外の情を含む。しかれば古は情のみにして、今は姿の論としるべし」とし「其情は其姿にしたがひてあれどもなきがごと」しと言っている。つまり、去来にとっては、情は景の余情として、景をはなれて存在しない。景は常に詠句の対象として情を帯びている。其角のように、「景情のはなるゝといふ事」はありえないものの如くである。

(2)唐木順三『無用者の系譜』『無常』は『一遍上人語録』に「自受用といふは、水が水をのみ、火が火を焼がごとく、松は松、竹は竹、其体をのれなりに生死なきをいふなり」とあるを掲げて、芭蕉との類似を言っているが注意すべきであろう。『語録』には尚「華の事は華にとへ、紫雲の事は紫雲にとへ、一遍はしらず」といった論法も見え、芭蕉が直接『語録』を読んだ可能性はないが、時宗の関係から耳に入ったということは考えられてもよい。

(3)俳諧大辞典「懸」（金子）

五

『おくのほそ道』の場合を考えよう。「方丈記」をふまえて成った「幻住庵記」の成功が、いかに『おくのほそ道』をして試筆ならぬ成就を期せしめたかという事は、再び同じ長明の（作と当時思われていた）『東関紀行』を構想に用いた事[註1]からも察せられるが、その着手の時期は元禄四年の落柿舎滞在中であったと推測される。滞在の毎日を記した「嵯峨日記」によれば、芭蕉は『本朝一人一首』『松葉集』を座右に置いて、日々の参考に供していた。そして、ひと日、次のような意見をもらしている。

一人一首、奥州高館ノ詩ヲ見ル。高館聳レ天星似レ胃。衣川通レ海月如レ弓。其地風景聊以不レ叶。古人といへ共不レ至二其地一時は不レ叶二其景一

これは「絶景にむかふ時はうばはれて不レ叶」と無縁の言とは思われない。どちらかを念頭において一方の発言があったものと思われるが、『猿簑』に発表した「夏草や兵共がゆめの跡」を、奪われる事なく高館の本意を摑みえたとする自信が、はじめて伝統的類型を批判する立場に芭蕉を立たせたものであろう。あるいは景に負け、あるいは情に負け、あるいは口を閉じた動揺の末に、やっと会得した一つの境地であったろう。

小西甚一「芭蕉句分析批評の試み・2」（文学・昭38・9）は

夏草や兵どもが夢のあと

は、モードとしておもに描写型であり、主題の「常住・流転」という思想は、思想の形では叙述されていない。しかし、その主題は、句の全体的な効果としてあざやかに表出されており、虚実相兼の作品だといってよろしかろう。わけていえば、上五の「夏草や」が実中虚、あとが虚中実に相当するけれど、ひっくるめて見れば、実中虚にいくらか傾くかもしれない。主題を底深くひそめた描写型の表現こそ、貞享期と元禄期とを区別するもうひとつの特色だと思われる。

と述べているが、杜詩を背景にしたこの句の達成には、小西説を裏付けるべく、直接には素堂の影響などが大きかったかと思う。貞享四年刊『続虚栗』の序で素堂は、

ある時人来りて今やうの狂句をかたり出しに、風雲の物のかたちあるがごとく、水月の又のかげをなすにゝたり。あるは上代めきてやすく、すなほなるもあれど、たゞにけしきをのみいひなして情なきをや。古人いへる事あり、景の中に情をふくむと。から歌にていはゞ、穿レ花蛺蝶深深見（トシテ）　點レ水蜻蜓款款飛（トシテ）

れこてふとかげろふは所を得たれども老杜は他の国にありてやすからぬ心と也。まことに景の中に情をふくむものかな。やまとうたかくぞ有べき。

と言っている。ちょうど景気の句が俳壇にはやり出した頃で、その初心にもまねやすい安易な傾向を衝いて、景の中に情を含むべきを言っている。かような論は、たとえば『唐詩訓解』巻首の「読唐詩評」に「曾氏曰、情中有レ景、景中有レ情、以レ事学レ意、以レ意融レ事、情景迭出、事意貫通、近体之妙也」と引かれており、『氷川詩式』巻末の「学詩要法」にも「作二律詩一、情中有レ景、景中有レ情、以レ事為レ意、以レ意融レ事、情景迭出、事意貫通、律詩之妙者也」[註2]と引かれていて、詩論としては当時の常識であったかと思われる。さて引用の杜詩は、曲江二首の一つで、その第五・六句の引用。貞享二年刊の『杜律集解』によれば、「穿レ花點レ水、物皆自適、吾何独不レ然」とある。その背景には情を重んずる時代思潮があり、出版界の事情とあいまって杜詩の流行をもたらしたわけであるが、素堂の意見は当然、蕉門の諸家に影響を与えた事と思われる。同じく『猿蓑』撰集の際、「病雁の夜寒むに落ちて旅寝かな」と「海士の家は小海老にまじるいとどかな」の二句について、芭蕉が去来・凡兆の意見をきいたことが『去来抄』にみえるが、「病雁を小海老などと同じごとく論じけり」と笑った時には、景中に情を含む方法論が芭蕉にははっきり自覚されていたものと思われる。

かくて『蕉翁文集』所収の松島詞書にある「島〳〵や千々に砕けて夏の海」は元禄七年までの『おくのほそ道』推敲過程で削られた。素堂に相談して文をとゝのえたというが、景にあわせて情の負けたこの句は、紀行中最大の名所に据えるにはやはりふさわしくなかった。「詩人の興象といへるも同事にて、たとへば松島宮島の絶景を詩に賦しても、打詠て賞するの情をもたずしては、いたづらに画ける美女を見る如くならん。この故に、文句は情をもととすと心得べし」などと『難波みやげ』の発端を引き出すまでもない。しか

し、同じく松島に句がなかったとしても、それは「或は、吉野を花の山といひ、或は、是は〳〵とばかりと聞えしに魂を奪はれ」た吉野の場合とは違っていた。それも出発の前には、あるいは、「師、まつ嶋にて句なし」とした土芳が『蕉翁句集』に貞享五年以前の作としているので、もっと前かもしれないが、「あさよさを誰まつしまぞ片心」と

あふ事をいつしかとのみ松嶋のかはらす人を恋わたる哉

陸奥にありといふなる松嶋の待に久しくとはぬ君かな

（類字名所和歌集）

などの伝統的風詞を用い、「名所のみ雑の句有たき事也。十七字のうちに季を入、歌枕を用て、いさゝか心ざしをのべがたし」[註3]（桃舐集）と、季を犠牲にしてまでも歌枕に執着を示している。しかし、これは机上の作で景をたずねたものではないから、いたし方あるまい。松島に至って芭蕉は古典的類型に奪われぬ事を第一に心がけた。その結果が景に情の負けた句作りとなったのである。景は摑んだが「その微の顕れて情感る」ところまでいかなかった。『猿簑』撰をへて、『おくのほそ道』を執筆する時、芭蕉はやはり「予は口を閉ぢて」と試筆を重ねた同じ手法を採用した。しかし、もはや「本意なきわざ」とも「口惜し」「無興の事なり」とも言わなかった。素直に「眠らんとし」、又「いねられず」餞別の詩歌をとり出して静かに鑑賞の時をすごしている。この落着きは、「嵯峨日記」で高館の詩を読んだ折のゆとりに通うものがある。一方で「夏草や」の境に達した充足感があったのである。古典的類型との対決を超克し、景中に情を含める句作りの次元で句を捨てた。かっての吉野体験で示唆を得た軽みが、この推敲の時期には一つの主張となり、「かかり」から素材へと及んだ。名所の句を捨てる事にもはやそれ程の抵抗感はなかったのである。

註

(1) 拙稿『おくのほそ道評釈』解題

(2) 『連歌延徳抄』に「景気の句にも心の籠りたるも侍り。又心はなくして、たゞ眺望なるも侍べし」とあり、景気と心を対立させる論も、あるいは詩論の影響下に成ったかとも思われるが、景情の用語をそのまゝ採用したのは元禄期の俳論が最初であったろう。元禄十年刊『真木柱』の朋水の序に

はじめをはりなに〳〵の品をわかちてひきたる句、みな景情をのづからなるをや。そのをのづからなる所にいたりても、我句我心にえさらぬも有べし。さるを、今此人を以てきてこそその句の玉はみがゝるれ。景中の情、情中の景、しるしらぬのさかひはつかしや。（中略）されば一念円明古今にわたる。唯、景情をむねとして秀逸をたしなむべしと正路に手をひく物ならし。

とあり、その集、その人の性格からすれば、元禄末年には俳論としても特殊なものではなかったかと思われる。其角が『句兄弟』に西鶴の「鯛は花は見ぬ里もありけふの月」を、「されば難波江に生れて、住よしのくまなき月をめで、前の魚のあざらけきを釣せて、写レ景嘆レ時のおもひ、感レ今懐レ古」と評しているが、『氷川試式』の「学詩要法」に引く詩の九法のうち「登臨之詩不レ過下感レ今懐レ古写レ景歎レ時思レ国懐上レ郷」によったもので、やはり景の中に時を歎ずる情を含めるの論である。

(3) 『三冊子』にも同様の記事がみえる。